



68年運動：ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ [翻訳]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ギルヒャー=ホルタイ, イングリッド, ペピン, ハンス・ヨアヒム, 大津, 俊雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005895

68年運動—ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ

ハンス・ヨアヒム・ペピン
Hans-Joachim Pepping (大阪府立大学)

大津俊雄 (神戸国際大学) 共訳

以下に翻訳者は ^{イングリッド・ギルヒャー・ホルタイ}Ingrid Gilcher-Holtey 著、Die 68er Bewegung. Deutschland-Westeuropa-USA (München 2001) の翻訳の第二章の後半を掲載する。

第2節 デモから抵抗へ—抵抗運動の触媒としてのベトナム戦争

フランスがベトナムから撤退した 1954 年以來、ベトナムはアメリカの外交戦略や安全保障戦略にとって紛争の温床となった。1960 年つまり FNL (フランス自由戦線) の設立時点から、反抗ゲリラ戦争が最初の段階では隠されたままであった。アメリカ合衆国のあからさまな軍事介入のきっかけは、1964 年 8 月 2 日のトンキン湾事件であった。そのときアメリカの駆逐艦が北ベトナムの巡洋艦によって攻撃された。こうした事件はアメリカの北ベトナムに対する報復攻撃を招いただけでなく、更にアメリカ大統領に東南アジア地域に「無制限」に介入する権限を与えるという 8 月 7 日のアメリカ議会の決議を招いた。こうした決議はベトナム戦争の幕開けになった。もう既に 1965 年末までに 23000 人のアメリカの若者がベトナムに配備されていた。1965 年にはその数字は 208800 人にまで増加した。1966 年には 460300 人までに増加した。このあからさまな軍事介入が世界中の批判を呼び起こした。

アメリカ合衆国：「ジョンソン大統領がベトナムでの宣戦布告なき戦争を終結し、冷戦で悩む危険地域に中立的合意を促進するよう」要求する決議案が 1964 年 12 月 30 日に全米の SDS 集会に提出された。更なる宣言は「合衆国がベトナムから撤退しない限り、兵役に抵抗するよう」提案している。両案とも多数派を獲得できない。その代わりアメリカのベトナムでの軍事参加に抵抗する「ワシントンへの行進」を市民運動の模範に従って計画することが決議される。(註1) この行進が 1965 年 4 月 17 日のイースターの週末に行われていた時、約 15000 から 20000 人がデモに参加した。これは SDS にとり驚くべき全米的勝利である。だがこの成功は連盟の組織的成果と言うよりむしろ次の事実のものと見なされる。つまり 1965 年 2 月 8 日に更なる軍事騒動が起こった。というのはプレイク米軍基地 (在ベトナム) への FNL の攻撃で米兵 8 人が殺され、何百人も負傷した。この事件はアメリカに更なる北ベトナム空爆攻撃を呼び起こした。宣戦布告もせずに戦争状態に陥った。この新情勢で SDS 代表 ^{パウエル・ポッター}Paul Potter は行進の組織者として世間の脚光を浴びた。彼は自分に与えられた注目を利用し、ジョンソン政権の軍事活動

をアメリカ国内の差別問題や貧困問題と関連付ける。外交と内政の政策を結び付ける彼は、両方を「システム」の出来事として解釈しようとしている。「このシステムは顔の無い恐ろしい官僚制度を作っていて」「物理的な価値を人間的な価値の上位として永遠に位置づける。それにもかかわらず自分を自由と見なし世界の警察官の役割を享受するにふさわしい者とみなす。」*（「見なされる」という受身形を「見なす」と訳した）彼はそのシステムに名前をつけていないが、このシステムに「名をあげよう。このシステムを描写し、分析し、理解し、そして変化させよう」と要求している。彼の演説は、その戦争を終えこの戦争を生んだ組織を変えるために、幅広い社会運動を起こそうという呼びかけに合流する。アメリカの問題はベトナムに在るのではなくて、むしろ国内にあると彼は結論付けた。それ故ベトナム戦争が想定外になる民主主義的で人間的な社会を作ることが重要である。こうした目的はベトナム国民とワシントンの抵抗運動参加者とを結びつけている。FNL の名をはっきり言わずにポール・ポッターは合衆国学生の抵抗運動と第三世界の抵抗運動とを関連付けている。SDS のメンバー数が増える、しかし1965年6月のケワディンでの会議が示すように、それと共に連盟の異質性も増加している。益々影響を増しているのは5月2日運動（M2M）の名を自分に与え、毛沢東派のPLP（進歩的労働者党）にコンタクトを持ち、ベトナム戦争に完全反対のアジテーションに集中している集団であった。

西ベルリン：1965年当初以来、西ベルリンのSDS内にはワーキンググループがある。そのワーキンググループが南ベトナムを帝国主義や植民地主義によって抑圧されている社会の例として観察している。こうした様々な討論から1965年の冬学期から65年の冬学期の終わりまでの討論が原稿になる。著者Jürgen HorlemannとPeter Gängであり、この原稿は1966年に「ベトナム—紛争の成り立ち」と言う題名でズアカム出版社のRegenbogenreihe（虹のシリーズ）に出版されている。問題対象への接近は先ず理論的・歴史知識的であるにもかかわらず、USAのベトナムに於ける軍事作戦への批判は早くも啓蒙運動やデモ運動の形で表現している。ASTAの代表LevevreとDamerowによる1965年初夏「ベトナムに平和を」の呼びかけの署名は、幕開けを意味している。この署名は、利用した政治的議席に関する討論を呼び起こして、2ヵ月半に亘るSpringer出版社のキャンペーンの後、アスタ代表を除名に導く。そのキャンペーンは署名呼びかけの発起人をSEDのシンパとするものである。（註2）ベトナム戦争批判を共産主義者たちに任せないようと言う呼びかけで、とりあえずアシスタントに昇進した旧SDSのメンバーは、特にベルリンにおいてアメリカの作戦への批判を述べる必要性を弁明する。それと同時に彼らは「ベトナム戦争に関する説明」のために公に叫ぶ。全ドイツで70人の作家Ingeborg Bachmann, Heinrich Böll, Hans Magnus Enzensberger, Erich Fried, Martin Walser, Peter Weissと共に「グループ47」を含めて）並びに130人の教授や助手は宣言にサインする。この宣言は1965年12月1日に発表される。エアハルト首相が12月20・21日にワシントンを訪問したのをきっかけとしてドイツ政府が

アメリカのベトナム政策を道徳的に支え、アメリカの政治目標つまり共産主義への抵抗をドイツの関心事でもあると説明した時に、ベトナム戦争に対するドイツ社会の態度や見方を巡る葛藤が深刻になる。

「エアハルトとボン政党が『殺人』を支えている」とポスターに書いてある。それは約40人のSDSメンバー達(その中にはルディ・ドウチケとベルント・ラーベルもいる)が1966年2月3日から4日の夜中にベルリンの町の建物の壁に貼ったものである。この行為はSDSベルリン地方連盟との相談無しでなされている。ベルリン自由大学の様々な学生グループ(SDS、SHBやアーギュメントクラブ)によって組織され2月5日に予定されている反ベトナム戦争のデモに先んじて、プラカードを造った人達が貼ったものだ。これだけではなく彼らは言語的や内容的にも戦争現場の解釈をラディカル化している。例えば「ナパーム爆弾による殺人! 毒ガスによる殺人! 原爆による殺人!」。そのポスターを貼った人は葛藤の解釈を「武器を取ろう」にのみ見ている(大変革に於ける大学の中にポスターが再生されている。)それはベルリンSDSの中のベトナム戦争に対する少数派の意見や学生の反対派の意見である。だが彼らの戦略つまりSDS内の事前討論無しで、しかも他大学の学生グループとの相談も無く、挑発的な行動を実行することが模倣されている。なぜかと言えば2月5日の公式デモ集会のあとでも参加者のある部分がアメリカ文化センターへ何百人も行進し建物を包囲し、アメリカ国旗のポールから旗を取った。その挑戦的抵抗運動はエスカレートして、アメリカ大使館の前面に卵を5つ投げつけた。ドイツ世論で注目を浴びたのは、全ての看板や動員宣伝、演説よりも、この行動であった。

ベトナム戦争の出来事の印象を受けて、並びに西ドイツの公開討論の影響を受けて、SDSの全独代表者は「ベトナム—模範の分析」というテーマに関して、会議を計画している。それは5月22日にフランクフルトで行われる予定である。会議の準備段階でSDSの連盟は分割されている。彼は武器使用の即時停止とアメリカ軍のベトナムからの即時撤退を主張するべきか、他方それとは違ってベルリンのSDSメンバーが要求するように「ベトコンの勝利、我々の民主主義の勝利」というスローガンを発表するべきか。決定的影響を与えたのは、あるインテリの仲裁であった。彼はアメリカとドイツに於ける新左翼の間の繋がりを作ることを自己の課題とした。その人はHerbert Marcuse^{ヘルベルト マルクーゼ}であった。1932年以降Max Horkheimer^{マクスホルクハイマー}が主導した「社会研究所」に密接に結ばれたマルクーゼは、ヒットラーがまだ権力を掌握する前にドイツを去って1934年にUSAへ移民した。その研究所のほかのメンバーと違って、第2次世界大戦後に彼はドイツに帰国しなかった。フランクフルト大学への招聘という彼の希望は実現されなかった。カリフォルニアのサンディエゴ大学で政治学教授の任を勤めている彼は、アメリカの学生運動または反ベトナム戦争運動の形成を興味深く眺めた。彼の本「一次元の人物」(1964年)はまだドイツ語で出版されていない。しかしSDSの周辺ではもう既に受け容れられて

いた。そのテキストはドイツ語訳で「抑圧的な慣用の批判」という本の部分として秋に出版掲載される予定であるにもかかわらず、彼の 1965 年の論文「抑圧的な寛容」の海賊版が準備されていた。68 歳のマルクーゼが SDS の会議場で教壇に上がるとの期待が高い。

W・アドルノはヘッセン放送局で放送した「アウシュビッツの教育」という講演でこう説明した。「全ての政治的授業が次の様なことに、つまりアウシュビッツの繰り返しが無い様に焦点を当てなくてはならない。」そう言った 32 日後にマルクーゼも国家主義的過去を取り上げて、その過去を現代化して、その中から生じる義務を拡大している。彼はベトナム戦争に対する抵抗を、西ドイツの大学の全ての学生や教授の「道徳的義務」としている。彼の目で見れば教育や授業の改革は十分ではないということを、こう言う風に彼は間接的に暗示した。「決定的なのはアンガージュマン」と言うのが彼のメッセージである。つまり「歴史の中には」と彼が説明しているように、「やはり罪のような何かがあって、そしてベトナムで起こっている一般女性や子供の虐殺、食料品の計画的破壊、地球上で最も貧困で無防備な国の一つへの大量爆撃等の事態を弁護する必要は、戦略であろうが技術的であろうが国家的であろうが必要が無い—それは罪だ。それに対して私達は希望が無いと感じていても抵抗しなければいけない。単なる人間として多分生き残れるために、そして多分他の人のために、ある程度の人間的な存在を可能にするために、またはこの抵抗運動を通してその恐ろしさやショックが短縮されることが多分できるであろう、今日の条件において、これらは計り知れないほど重要である。」

ドイツの未解決な過去に対する敏感さはドイツの抵抗学生を特徴付けているが、それ（敏感さ）を背景にしてそうした文章が熱心な呼びかけであり、父親の世代が反対を怠った「罪」から結論を導き出すための呼びかけとして理解される可能性があった。（註 3）「罪」の問題の強調を通してドイツの学生の困惑が決してアメリカの学生の困惑と同様ではなかったが、こうした「罪」の問題は良心の問題となって態度表明を求めた。フランクフルトの SDS 会議はマルクーゼに従った。彼はドイツ連邦共和国の ルドヴィグ エルハルト Ludwig Erhart 首相に電報を送ろうと決めた。その電報で、ドイツ国民の名義でベトナムでのアメリカの戦争を正当化する権利をドイツ政府が持つことを認めない。ベトナム戦争は会議の総括宣言の中に「南ベトナム住民の解放戦争として、と同時に政治的な正当防衛として」定義された。FNL の可能な勝利を、他の解放運動の成功可能性の証明と見なしながら SDS は「三大大陸派 ディ トリコンティネンタル Die Tricontinentalen」の位置に近づいていた。これはラテンアメリカ・アジア・アフリカの民族連帯会議を意味している。

キューバ：チェ・ゲバラの「フォーカス理論」に基づき、1月3日～15日ハバナで開かれたアフリカ・アジア・ラテンアメリカ諸民族連帯会議は、次の内容から始まった。

つまり革命的転換のための客観的条件が、先ずゲリラによっていたるところで作られるべきであり、この条件が解放闘争に必要な改革的意識を活動を通して生み出すということである。従ってこの理論は意識を変化する行動に解放過程における鍵の役割を指摘し、それと同時に発展途上国における搾取や依存の関係を止揚するために、武力闘争の必要性を強調した。ルディ・ドウチケの周辺のサークルによって呼び起こされた2月3日のビラ運動によってベルリンに移転されたのは正にこのメッセージであった。そのビラが内在していたのはもう一つの考えであった。その考えはチェ・ゲバラのフォーカス理論の中に内在され、ハバナ会議によって共感を得た。つまり第3世界の解放運動の戦略と目的と、西洋工業国の抵抗運動とを結合することは、支援を意味する結合であり、この支援は西洋メトロポリスの抵抗運動を通して引き起こすべきであった。連帯会議のメッセージが実践に移されたのは、特に合衆国の黒人学生により維持された学生組織—SNCCによる。このSNCCはハバナで主役^{ストークリー・カルマイケル}Stokely Carmichaelが代表した。

SNCCは国民運動の枠内での直接行動の多数を調整する目的で1960年に成立された学生連盟であり、その国民運動は合衆国における人種差別反対への市民抵抗の実践方法を通して立ち上がった。1966年SNCC学生連盟はこの運動のアメリカ社会への統合を狙う戦略と関係を切り、かつ政治的戦いの「必須条件 ^{コンヂキオ シネ クワ ノン}condicio sine qua non」としての非暴力理論とも縁を切った。このように反乱している公民権運動の様々な行動を聴視する目的の学生運動は、統合を狙っている公民権運動と縁を切る。ハバナでの3大陸会議の影響を受けて、非暴力調整学生委員会は自分達を種々の国際解放運動の一部分と見なし始める。その委員会は合衆国でアフロアメリカ人の反植民地解放闘争を導いている。カーマイケルにとって革命的主語となるのはプロレタリアではなく、むしろこうした役割を受け取るのはゲッターの黒人である。1966年10月に設立するブラック・パンサー党と密接に繋がっているSNCCは対決に全てをかける—それはゲッターに於ける貧困の戦いのためだけでなく、むしろ反ベトナム戦争の運動の枠内でもそうであった。：「戦争を家へ持ち帰ろう（アメリカを戦場にしよう）」これはアメリカのSDSも従っているスローガンになる。

フランス：1966年10月に^{フラン クリヴィーヌ}Alain Krivineと^{アンリ ヴェベル}Henri Weberによって主導されたトロツキー一派グループJCRは全仏ベトナム委員会(CVN)の設立を呼びかける。共産主義学連合UESとの分断以降、JCRは自分を進歩的国際青年運動の一部として理解した。この青年運動は大学の高齢化した構造に対する意識を学生世界で作ろうとし、学生全員を政治化し、同時に学生達を第3世界の様々な解放運動の戦いに意識を向けさせることを目的とする。反ベトナム戦争へのアンガージュマンはこのグループに次の様な可能性を開いている。それは彼らの反資本主義的で反帝国主義的な解放戦略を、一つのプロジェクトの中に束ねることと具体化する可能性である。もう既に1967年2月以来、このトロツキー派学生達は反ベトナム戦争に関してもう一つの競争相手が居ると驚き、競争相手

と競合する。なぜならこのグループは 1966 年の年末の中国共産党とソヴィエト共産党との緊張を背景にして設立を決心した毛沢東派の UJC 青年共産主義者連盟(マルクス・レーニン主義)は同様に草の根レベルからのベトナム委員会の設立を決心したからである。自らのセンターをエコール・ノルマル・スーペリアル(国立高等師範学校 ENS)に置く若い毛沢東派の学生が、哲学者^{ルイ・アルトゥーサー}Louis Althusserによって靈感を与えられる^{レジ・ドブレ}Regis Debrayと共に彼は 1960年に ENSでの試験に合格後キューバに旅立ち、^{フィデル・カストロ}Fidel Castroの友人となってチェ・ゲバラのパートナーにもなった。そのレジ・デブレと共にアルチュセルはハバナでのラテンアメリカ・アジア・アフリカ民族連帯会議に参加した。毛沢東の方針とトロツキー派の方針とのイデオロギー的敵対感が抵抗運動の調整を妨げる。その結果としてフランスで形成しつつあるベトナム戦争批判の国際的認識は大半がジャンポール・サルトルのアンガージュマンの段階に制限されて、そこに留まる。ただしモスクワが一応方向付けている平和運動の様々な行動を別として、^{フランツ・ファノ}Frantz Fanonの「呪われた地球上の人達」という本にサルトルは前書きして(1961)、その書物の国際的広がりに寄与した。この本は第3世界の民族解放闘争、反植民地解放闘を正当化し宣伝している。そのサルトルはアメリカの北ベトナムの第2波空爆(1965年4月)後、その戦争の問題性に注目した。イギリスの哲学者^{バートランド・ラッセル}Bertrand Russellと共にサルトルは 1967年5月と10月に「裁判」(ラッセル法廷)という2つの公判を作った。それは後に戦争犯罪を捜査対象にする「裁判」である。アメリカ政府がベトナムに対して起こしている戦争は、ジュネーブ条約第2条による集団虐殺の意図で特徴付けられている、という結果に法廷は到達している。しかしフランスではベトナム戦争に対する運動化過程が弱いまままで留まっている。何故なら^{シャルル・ド・ゴール}Charles de Gaulle大統領が西側唯一の首脳としてアメリカのベトナム政策を批判し、それによって——とサルトルが解釈しているが——フランス人の良心を落ち着かせたからである。こうした「アパシー(無関心)」に対して反抗しながらサルトルはラッセル法廷に対して、戦争事件について世間を啓蒙し、特に学生や労働組合を抵抗運動に動員するという目的を与える。

イタリア：1967年当初イタリアの大学にもベトナム戦争に対する抵抗が始まる。ベルリンと同様にこうした抵抗は3月のトリエントでの写真展・映画界・討論会から出発する。運動がキャンパスから都心に移動している。その抵抗運動はそこで挑戦的行動の形を取る。

その狙いは世間を目覚めさせることである。ベトナム・アジテーション(政治的啓蒙活動)の発信者に属する社会学の学生が「大学での初めての政治スト」を呼びかける時、そしてストの2日後に研究所の占領に形を変えると時、その抵抗運動は始めて頂点に達する。その以前にはネガティブ大学の設立を巡る考えがあった。C. ^{ライト・ミルズ}Wright Millsの「批判的社会学」というコンセプトに基づいて、トリエント大学社会学の学生が社会学者の教育実践を批判し始め、それと同時に次の変化をし始めた。それは批判的思想を可能にするための変化であると同時に大学を中から変化すべき空間創造を通したものであっ

た。こうした空間が「ゲームのルール」の違反を通して作られる筈である。つまり授業ボイコット、催し妨害、または教授批判によって。この目的は二重である。つまり一方では社会学勉強の教育や、家庭を貫通する資本主義社会の影響から解放し、他方では学生達に自分の考えを意識させて、彼らが無頓着な態度から引き戻す。学生は発言の自由という基本法が制限を受けても、彼等の教育を支えている資本主義システムの様相と同様に無関心に受け容れる態度を見せている。この否定的大学の主役の行動が模倣される。3・4 週間以内のあつという間にその抵抗運動はローマ・ピサ・ミラノ・フィレンツェやペルージャの大学へ飛び火した。1967 年 6 月に「否定的大学のマニフェスト」が出版される前に、学生達が彼等の理論の模範的实践を明らかにした。

その挑戦的行動戦略は、意識過程の崩壊や操作と抑圧メカニズムを暴露することを狙っている。学生達は宗教的グループの道徳的（動機の）行動からではなく、むしろ各民族の自決権を指摘して 1965 年以降 FNL の目的を支えている共産党から特に一線を引く。FNL をレジスタンスの正統な後継者として見なしている共産党は、過去を利用してイタリアの労働者運動とベトナム解放運動との繋がりを作ろうとした。（註 4） 学生達の反ベトナム抵抗の支持グループが何を狙っているのか、それはやはり大学における抵抗とベトナムに於ける出来事との間の現在の共通点の明確化である。言い換えれば共産党が反ベトナム戦争の運動での主導役を奪うために、想定した行動関連付けを現実化しドラマ化することが目指されている。

抵抗の移動：様々な支持グループ間の連帯の成立やアメリカからヨーロッパへの「抵抗の移動」が、集団的意味（感覚？意識？）構造の行動ダイナミクスを通して促進される。3 人の若者の書物は学生達の抵抗運動に行動方針や目的方針を紹介した。
フランツ ファノン Frantz Fanon の著書「この地球の呪い」、エルネスト チェ ゲヴァラ Ernesto Che Guevara のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ民族の連帯機関への手紙「2 つ 3 つ沢山のベトナムを作ろう」並びに ヘルベルト マルクーゼ Herbert Marcuse のフランスからのを別にした研究書で「一次元の人間」と「抑圧的寛容」。こうしたテキストの並行的受容は、自己理解の象徴的システムを形成するために大いに貢献した。このシステムは 3 つの要素で特徴付けられていた。

第一：第三世界の自由運動と西洋工業国における解放運動との関連を強調しながら、この 3 人の著者達は新左翼学生の支持グループの知的先駆者としての委任並びに行動的歴史過程に手を入れるボランティアを強めている。

第二：革命的転覆のための客観条件を作る道具（ファノン、ゲバラ）としてであれ、かつ抑圧された少数派のための防衛の道具（マルクーゼ）としてであれ、現在の社会闘争の中の暴力に重要な役割を果たさせて、彼らはこうした暴力問題との論理的討論を導入している。

第三：「新しい人間の創造」への希望は、あるトポスを作り出した。その希望とは呼びかけを通して植民地主義からの解放（ファノン）や帝国主義に対する抵抗（ゲバラ）ま

たは抑圧的社会への「拒否」(マルクーゼ)と結んだ。このトポスは様々な方法で解釈され得たが、しかし共通の前提に結び付けられていた。つまりその前提となるのは「新しい人間」が社会革命に先立っている行動を通して生まれてくるかのような推測であった。解放運動との同一視に特別な意義を与えたのは、主にこの要素であった。この同一視は抽象的な程度に留まるはずが無く、むしろ具体化しなければならなかった。というのは行動の中で現れるべきである。この考えをベトナムに適用すれば、次の意味となる。つまりこの二重の変動プロジェクトを実行させるためには、ベトナム平和への要求は十分ではなかったし、むしろベトナム解放戦線の勝利が必要だった。(参照 Ali 1998、148 頁)。

しかしもう一度区別を立てることが重要である。つまり 1966 年 5 月に SNCC 幹部に出世した^{ストークリー カルマイケル}Stokely Carmichaelの指導下でファノンの本は黒人組織の「聖書」に発展し、この学生運動組織を武装自衛戦略へ移動させる方向へと導いた。この路線変更は^{マーティン ルーサー キング}Martin Luther Kingが極端に拒否したが、彼はその組織から自分の連帯を引き上げず、黒人組織を公に攻撃しないという自分のルールに忠実にあり続けた。この新 SNCC 戦略に密接に結びついたのは、若い黒人の新しい自己理解の発生であった。若い黒人達は自分を合衆国内の「植民地化された民族」として定義し、白人との協力に制限を加える「ブラック・ナショナリズム」を作り出した。SNCC と SDS が協力して行なったゲッター・プロジェクトも、これによって打撃を受けた。SNCC 側の排除政策やアメリカの大学における兵役免除の選択順位表の導入は、アメリカ全土の SDS の第一位の注目をベトナム戦争へとまた引き戻した(1965 年 5 月)。SDS の幹部が 1965 年「ワシントンへの行進」の成功にもかかわらず、SDS は自分の活動や行動をこの一点に集中させることを拒否し、再びベトナム戦争のテーマに戻ってくる。全国会議は「ゲッターの反乱を支持しよう」(1966 年 12 月)と SDS メンバーに呼びかける決議に同意する。その上にベトナム空爆終結要求を、アメリカのベトナム即時撤退要求に入れ替えた。兵役召集への抵抗に呼びかけ、脱走兵に援助や支持を約束した(1967 年 6,7 月)。全国の書記に選ばれた^{マイク シュピゲル}Mike Spiegel、20 才は 1966 年 11 月にハーバード大学のキャンパスで同僚と一緒にロバート・マクナマラの車を揺さぶり、国防大臣を学生との公開討論に参加させることに成功した。挑戦的行動を通してのみ注目を浴びることが出来る経験、SNCC のラディカル化、1967 年夏のゲッター暴動、兵役への更なる学生招集、そして既存政治機関が戦争を終えるかに対する消えつつある信頼、ということなどが口だけのプロテストから実行の抵抗へと転換し、ファノン、ゲバラ、マルクーゼのような著者を引き合いに出しながらこうした抵抗を正当化するための土台をアメリカ SDS の中にも準備した。「以前、私達は話すばかりである」とあるフリースピーチ運動のメンバーがその転換を正当化した。「今、私達は行動しなければならない。私達が反対しているものを止めなければならない。」(^{フレイザー}Frazer 152 頁)

1967年秋のドイツ SDS 全国代表者会議は、幹部が SNCC との有機的コンタクトを作り、SNCC が非合法化されたりメンバーが死亡した場合に、「西ドイツやベルリンに於けるアメリカ帝国主義の視点に対して、直接行動を実行しよう」と要求した。また同年にブラック・パンサーの説明付きの写真がドイツ語で掲載された。ドウチケとサルバトーレは、彼らが翻訳したチェ・ゲバラの「2つ3つ沢山のベトナムを作ろう」と言う本で論じたように、ドイツ SDS の反権威主義派閥が暴力を「組織化された拒絶」として定義し始めた。こうした拒絶はマルクーゼによって鼓舞されたことばで説明された。「我々は武器化されていない体で、我々の教養を受けた理性でもって機械装置の最も非人間的部分に対して立ち上がって、ゲームのルールにも従わず、むしろ我々は意識的に直接的に我々独自の歴史を手に入れる。」SDS 内の反権威主義派閥が要求したこの「拒絶」は、例えば大学で（学生食堂の 10 円玉を巡る闘争から）始まり、「革命的意識グループ」の模範的行動にまで至った。模範的行動はメトロポリスに於ける矛盾を、自らの活動を通して明らかにさせた。（ドウチケ 1980、94～95 頁）。

まとめて言えば、3 人の理論家はベトナム戦争に反対している学生抵抗運動に「抵抗的」とすると同時に「計画的」である要素を提供した。共通の自己理解は、第 3 世界の解放運動との同一化を通して、そして西洋工業国における自分達の戦いを支えている行動戦略に基づいている知の方針を通して、定義されている。この自己理解が許しているのは、ベトナム戦争への宗教的・平和的・共産主義的な抵抗者から、学生プロテストグループの分離を可能にただけでなく、むしろ様々なグループや集まりに対して新左翼学生を統合しやすくしたことである。こうしたグループや集まりは 60 年代の過程で大きな共産党から、それぞれ様々な理由で分離した。たとえば毛沢東派のように「平和共存」戦略をヒントにしていた理由であれ、フランスの JCR（青年共産主義者同盟）トロツキー派のように反植民地解放戦争への大共産党からの援助を不十分とみなし、階級闘争のグローバルな移転段階における労働者階級の概念と存在の固執を退ける理由であれ、分離した。新左翼学生はラッセル法廷との協力のために連帯しやすくなった。その法廷はニュールンベルグ裁判の或る起訴状を基にして反人間的犯罪の構成要件を確かめた。学生運動が連帯しやすくなったのは、イタリア左翼の流れであった。イタリア左翼の中の様々な分派は労働者階級を基礎にしているが、そうした反人間的態度とまだ関係を絶っていなかった。しかし PCI（イタリア共産党）の覇権とレジスタンスの神話に対して立ち上がり、彼等の目で見ればイタリア共産主義者の改良主義的コースに行動統合する代わりに対決を目指すオルタナティブを対峙させた。

ベトナムの混乱への USA の軍事介入は、国内の様々な先駆的學生グループの抵抗に、国際的次元を与えた。つまり彼らを繋いでいる考え並びに共通戦略も与えた。西洋の各首都での軍事産業財閥集団に対する戦いの中では学生グループの社会批判が、資本主義工業国の搾取に対する戦いと第 3 世界の解放運動の戦いとが結びついた。反ベトナム戦

争運動の中の国内的で様々な解放戦略が国際的なシステム（体系、体制、制度）連関を得た。これにより新しい運動家やシンパの募集が可能になった。こうしたことを新左翼の思想的先駆者も学生支持グループもやはり計算に入れなかった。その上に新左翼学生支持グループが更なる現象で仰天させた。その現象による挑戦は彼らを試した。

第3節 「ケンタウロスの進攻」—— ビート・ボヘムと反文化

様々な考えの浸透は、改心の道、システムティックな媒体の道、合理的思考を身につける道、だけで行われている訳ではない。むしろアイデアから導き出される価値観や態度の戒律が頻繁に社会的慣習によって媒介されている。こうした慣習は、半分は意識的に半分は無意識的に心構えや振る舞い態度を刻む。住民権利運動家やシチュアシオニストによって宣伝されている「直接行動」や「場面の構造」の戦略は、行動場面の演出家や注目をかき立てる出来事によって社会的問題のために世間の気付きを作ろうとしている。その過程で聴衆の態度や活動する人（役者）の活動態度を変化させるためである。こうした扇動者の理論や実践はアメリカやドイツの SDS の部分を自分のものとし、大学でのプロテストの形成段階並びに反ベトナム戦争抵抗運動のプロテストの形成過程で、青年プロテストの流れと衝突して層になって覆いかぶされた。こうした若者抵抗運動の生き方（生活実践）や世界観は新左翼の知的地平線からは遠く離れているが、それにもかかわらず或る部分に関しては彼等の関心事と重なり合った。社会の中の政治・社会的アンガージュマンのためにではなくてむしろ社会からの撤退を決心したままで、反抗する若者はシット・イン（座り込み）やティーチ・イン（討論会）に対してビー・インやラブ・インを対峙させた。腹立たせているのは世間だけでなく、先ず最初に新左翼学生の中の抵抗エリートであった。

カワディン(ミシガン州)1965年6月：オリンピアのゼウス神殿の切妻破風に刻んだケンタウロスの進攻に似て（ロスザック）、寝袋や青い労働シャツにコットンジャケットやブーツを身につけた学生男女は、全米 SDS の代表者会議に侵入する。彼らは地域を越えた SDS の催しに以前は参加したことが無い。彼らはポートユーロン以来、連盟を導く人物を知らない。たった数ヶ月前か数週間前かに SDS のキャンパスグループに勧誘された彼らは、SDS を導く人達のやり方や慣習や話し言葉にもなれ親しんでいない。わずか一握りの者がマルクスについて聞いたことがあるだけである。長年のメンバーがすぐに見抜いたように、誰もルクセンブルグ、バーンシュタイン、ヴェーバー、レーニン、トロツキーを一切読んでいない。彼らは会議中に大麻を吸い始め、討論を組織化して決議案に導くあらゆる試みに抵抗する時に、その新人が引き起こす驚きは増大する。二つの文化がぶつかっている。それは互いに観察している。猜疑心で観察して互いに名付けてラベルを貼る。「ポートユーロン宣言」によって影響を受けたメンバー達は、その新人を「プレーリー・パワー」と名付けている。なぜかと言えば彼らは大抵アメリカの南部や西部の大学から旅行してやって来たからである。新人達はアメリカ東海岸に由

来する（6,7 才年上の）メンバー達を「オールド・ガード」として格付けする。この会議は今まで方向付けられた SDS メンバー達の間で見ると、不吉な結果に終わる。ケンタウロスが追い出すアポロンがない。彼らは部屋に留まって、自分の意志を通した。SDS の地方グループにおける自立や自決のために戦っている彼らは、全国事務局のために方針を定義し局員を決定する事を拒否した。会長の投票に関してさえ「先輩」は自分の意志を通せなかった。会長を支えている全国秘書の席を廃止から守れただけであった。先輩の全国首脳部は訓練されていて、それが SDS を他の米国学生グループに対してこれまで特徴づけてきたが、今まで彼らに育てられた新メンバーの流れは SDS の全てを逆転し、古い組織のエリートは力を削がれ、その後は地方グループが組織的に重視されていく。もはや彼らは自分の活動について全国事務局を経ずに、むしろベトナム戦争に対して「国際的批判の日々」を通して調整する。デモ文化がビート・ボヘムと反文化の流入によって変化し、はじめて運動化の成功が見られた。

「戦争よりも愛を！」：反戦デモの雰囲気益々打押し出すのは若者である。彼らは豊かな社会の装いを、ファンタジー感ある服やボロに着替えて、花や線香やカウベルを持って、ボブディランやハーレクリシュナの歌を歌い始める。バークレー大学の反乱後に社会学者は次の様に言った。「これまで反乱を起こした学生の出身家庭は、中流階層上部で左翼リベラルまたは左翼カトリックや平均以上のユダヤ社会であったが、このことは今の学生には当てはまらない。」トム・ヘイドンとポートニューロン世代の大勢の人と違って、彼らは30年または40年の始まりに生まれた人でもなく、むしろ戦後生まれであった。彼らの特徴付けているのは、次の事である。つまり彼らは多くの家庭に流入した自由主義的な教育スタイルに流れて、それは自由な清潔教育、マスターベーションを過大視しない、きつい自立は回避するなど、スポック博士の方法として紹介されたものであった。彼らは戦後のベビーブーマーの世代に属している。統計的には25歳以下の集団であり、このグループは60年代を中心にアメリカの人口の半分以上を占めていた。彼らが訴えているのは、憲法の理想と現実の矛盾ではないし、社会の価値と実践の間の矛盾でもない。彼らを動かしているのは若者世界や家族世界を出る時の現実との衝突である。つまり経済界との衝突または大学のテクノクラートの管理並びにアメリカのベトナムでの戦争や原爆の破滅との衝突である。

彼等の反応はボヘムとドロップアウトの世界への逃亡、テクノクラートの管理に対する拒否への逃亡、反体制主義への逃亡、参加を誘惑する消費の拒否、である。異なるライフスタイルとして目指したの^{ジャック・ケルアック} Jack Kerouac の「道の上で」と^{アレン・ギンズバーグ} Allen Ginsberg の「ハウル」が模範であった。しかしアジアの宗教や宗派も模範となった。（註5）瞑想技術の取得や禅仏教の規則（侘びさび）は内面的意識創造を目指している。こうした意識創造は、支配している社会や文化からの離脱を支えて、現在の世界に対する否定を強めるべきである。その若者の反乱階層と SDS が繋がっているのは次の3点である。第一

にテクノクラートの系統的システムの「狂信的合理性」からの離脱。第二に意識革命への期待、この革命は特に自分自身の個性の変化の第1位に方向付けられているが。(註6) 第三にC. Wright MillsとHerbert Marcuseの本の読書である。「ポートユエロン宣言」のように軍需産業財閥のメカニズムを詳細にたどる事をまるで考えずに彼らはより単純に議論する。けれども同様に強い影響を与える。つまり戦争より愛が良い。生き方の模範を示しているのはマルクーゼが「大きな拒否」と名付けた物である。

「大きな拒否」とは：新しい性関係とアルタナティブな住み方暮らし方の試行の中心となったのはサンフランシスコのベイエリア、とりわけハイト・アシュベリーである。そこは全米のドロップアウトの巡礼場であるが、20世紀当初のモンテ・ヴェリータ(イタリアのアスコーナ)の様に、出来つつある反文化のイメージを単に得るために来た様々なインテリの出会いの場ともなった。そのインテリの中にはSDSのメンバーも居る。SDSバークリーのJerry Rubinは、ここでLSDを始めて経験して、1967年にAbbie Hoffmanと共にサンフランシスコのシーンを政治化しようとする。トム・ヘイドンは距離を置いて、事の推移を観察する。ヒッピーになるためには年を食いすぎていると彼は考え、単に新しい外見が新しいアイデアや社会変革の新しい出発点を作っているのかどうかを、彼は疑っている。ハイト・アシュベリーの住民の生活観を強調するビートやフォークやロックの音楽も、トム・ヘイドンにとっては「彼の生涯のバックグラウンド」でしかない。だが自分に対するコントロールを恐れている彼は、ある公の催しの間に一回マリワナの効果を試してみる。しかし彼は大切な討論を全て聞き逃し、結果として他のこうした実験に背を向けることを心に誓った。それからはきつくて権力狂信的SDSの組織者としてヒッピーやイッピーに見られることには落ち着き払って甘んじて受け容れている。

バークリーのキャンパスには新左翼と反文化が混合している。ジュリー・ルービンによれば、革命する事は楽しくなければいけない。彼のスローガンは大学の学生に益々魅力を与える。ルービンと同様に兵役に徴集される先輩より、後輩の学生の方により関係の深いベトナム戦争に対するキャンペーン中には、新左翼学生の政治的議論とライフスタイル革命の精神や性的革命の雰囲気重なっており、それらはハイト・アシュベリーからバークリーのキャンパスに飛び火した。「カウンター (railing) パワー」や「ブラック・パワー」と「フラワー・パワー」が混合する。(註7) それら様々な抵抗を解釈して、ヨーロッパに於ける抵抗とアメリカに於ける抵抗との間を関連付けていて、それと共に新左翼の優位を再起させているのはヘルベルト・マルクーゼである。1967年6月にアメリカの学生が一体何に対して反乱を起こしているのかをベルリンの学生に説明している。マルクーゼによるとアメリカの学生達が「権威主義的で民主主義的なパフォーマンス社会」の「生活様式」に反対している、または「システムの至る所にある抑圧」に対して学生が反乱している。このシステムは「抑圧的・破壊的・生産的な力を通

して、全てを益々非人間的に商品へと降格し、外に向かって「テロ」で反応している。道徳的・性的・政治的な反乱を統一するこの抵抗は「社会全体に対して」の反対を表している。つまりこの反対は一次元的社会に対しての反対である。（註8） 満たされた欲求や操られた欲求に基づいて支配された階層の統合は一次元的社会の主な特徴としてマルクーゼは挙げている。満たされた欲求は、今度は独占資本主義並びに操られて抑圧された意識を再生産する。

学生運動並びにヒッピーやビートニクスのグループは、アメリカ社会の中を支配している抑圧的欲求と縁を切ったので、彼らはマルクーゼにとって「否定している野党」となった。この反対派は同時に「新しい敏感さ」並びに「重要な欲求」を見せているので、社会変化に導く事が出来る。しかしこれはマルクーゼが強く主張しているように一次元的社会に対する反対運動が「社会で対局している両極」から出来ている時に可能となる。その両極とは「持てる者」と「持たざる者」とである。学生達はインテリと共に持つ者のグループに属する。このグループは社会のラディカルな変化への欲求を見せている。それら少数民族または社会の隅に暮らす人々（失業者、健康のため働けない人）や第三世界の解放運動は、持たざる者のグループを形成している。こうしたグループは改革の力のポテンシャルを持っているグループとして理解され得る。マルクーゼは労働者階級を持たざる者のグループに含めたが、少なくともアメリカの労働者層にシステムの変化への欲求を認めないので、彼の結論はこうなる。新しい改革的力の誕生は「第三世界と後期資本主義の中心に於ける、変化する力の合流」の結果のみであり得る。こういう風にマルクーゼはドイツ SDS 中の反権威主義的派閥の戦略を支えている、並びにベトナム戦争に対して世界中に浮かび上がりつつあるベトナム解放戦線支援という抵抗運動の戦略を支えている。彼はピート・ボーヘムの文化的抵抗を強調している。しかし彼マルクーゼは文化的抵抗を同時に、新左翼の新しい出発点に従属させている。それは政治的・社会的・少数民族的で他の社会の隅に居るグループとの絆に方向付けられている。何故かと言えば彼の目では、西洋工業先進国野中の様々な社会勢力との協働を通してのみ、そして西洋の国々と第三世界との協働を通してのみに於いて、社会の変化が実現されるからである。

コミュニオン体験：英語版掲載のすぐ後、その本がズブヴェルジーベ・アクティオンのグループの中でも読まれた。このグループはインターナショナル・シチュアションから追い出された SPUR グループから分裂した集団である。ズブヴェルジーベ・アクティオンのグループは 1966 年夏に「後期市民社会の中の個人のごとく」という問題を取り上げながら、その成立を議論した。住民コミュニティーの形でアルタナティブな集団的生活団体の設立を議論して、1966、67 年の大晦日の夜に、理論から実行に足を踏み出した。当時ニューヨークに住んでいる作家 ^{ウーヴェ ヨンソン} Uwe Johnson のベルリンのマンションには ^{ディーター クンツェルマン} Dieter Kunzelmann、^{ウルリヒ エンツェンスベルガー} Ulrich Enzensberger、^{ドロテア リッター} Dorothea Ridder、^{ダグマル ゼーフバー} Dagmar Seehuber が

はじめての生活共同体を設立した。「メトロポリスに於ける革命的な生活共同体の設立のためのメモ」というマニフェストの中には、次の様に書いている。つまり「我々は実践を今行うために生活共同体を作る」、というのは「現実認識のための実践としての方法」である。このグループの立案に同席したルディ・ドウチケは、そのグループの実行には参加しない。順々に拡大している共同生活者が、2月にはSDSの州連合を占領する。運動化のためには主にベトナム戦争の問題設定が利用されるべきである、または非常事態法かどうかという質問を論争する競合的ワーキンググループに分割されたまま、その連合がコミューンの参加者に取りあえずの行動機会を提供している。ハプニングや挑戦的アクションで彼らはメディアの注目を獲得することに成功した。シュールレアリスムの立場に特徴付けられたパンフレットの掲載で、そして準備段階で警察が中断させたアメリカのハンフリー副大統領への「プディング暗殺」によって、このコミューンは1967年5月に「理論的作業のあからさまな無視」と「間違った直接性」のためにSDSから脱会させられている。これによりSDSの中ではコミューン実験が一回きりで終了した。しかしSDS外では話は別である。コミューン□の後には他のコミューンの設立が相次ぐ。ベルリンにも反文化や新左翼が新しい関係を結ぶ。しかし拡散の過程でコミューン理念も日常化の過程に支配される。シチュアシオン主義者のモダンな大都会主義への批判や、彼等の要求「異なる生活のための異なる町」(Constant)は「WG」つまり理想提示のプログラムを欠いた「居住共同体」の設立によって霧散した。この要求はベルリンの中にコミューン・ハウスを造るという建築学的草案として計画的な姿を現していたのだが。(註9)

註1：1919年ムッソリーニはローマへの行進をした。

註2：SEDとは旧東ドイツのスターリン派党のこと。

註3：ナチスがユダヤ人に対して犯した罪のこと。。

註4：「過去」とは第2次大戦の経験のこと。

註5：前者は'57発刊の小説、後者は'56発刊の小説(発禁処分)。

註6：けれども期待は社会の意識でなく自分自身の意識を変える。

註7：カウンター・パワー：経済学者ジョン・ケネス・ガルブレイス著「アメリカン・キャピタリズム」に出てくる^{ポリチカル} ^{モチフィケーション} political modification。

フラワー・パワー：カリフォルニアのヒッピー文化運動。

註8：マルクーゼの有名な著書「一時限的人間」を暗示している。

註9：共同生活のコミューンの中身がなくなり、物理的共同体になった。